想定外の告白の行方

小室　仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
想定外の告白の行方

【Ｎコード】
Ｎ８１３５Ｒ

【作者名】
小室　仁

【あらすじ】
小学６年から高校三年まで片思いをしていた彼に、けじめの告白を決意した主人公。
卒業シーズンの短編を書いてみました。
お暇つぶしにどうぞ。

これから起こる、全ての事が想定内だ。

あたしは唇をかみ締めて、自分で指定した約束の場所へと歩き続ける。

この日までに、何百回もシュミレーションを重ねた。
どんな痛い言葉を言われても、決して傷つかないと思えるまで、
自分の心を、わざと乱雑に扱って鍛えた。

初めて彼に出会った小学校６年生から、
今現在の高校３年の１８歳まで、
７年間、ずっとずっとあたしは鍛錬をしてきたのだ。

何を言われても泣かない。
拒絶されても、笑顔になれる。
大丈夫、あたしは大丈夫なんだ。

もう一度、自分の中で決心を繰り返すと、
あたしは大きく頷いて、歩く足を早めた。

今年の春、あたしは地元を離れて都会へ行く。
新しい環境、新しい大学、新しい出会い。
きっとあたしは変われるだろう。

だから、ウジウジと、
完璧なる片思いにしがみついて7年という、
情けない自分から卒業しなければならないのだ。

「ああ、でも、大好きだったな」

ふとこみ上げてくる、
胸をちぎられる様な寂しさに、
未練たらしくも、あたしは口を開いてしまう。
あたしは少しだけ足を止めた。

あたしはため息をつくと、
自分で自分を褒めてみせた。

そうそう、いい調子だ。
呟きが過去になっているじゃないか。
鍛錬が効いているんだ。
そう、こんな感じで全て過去にしていけばいい。

目を上げると、夕日がまぶしい。
生まれ育った見慣れた町の景色は、
初春の夕焼けのオレンジに染まっていた。
黒とまぶしいオレンジの、二色だけのモノクロの風景。

こんな夕焼けは、懐かしい放課後の彼の姿を思い出させる。
友達と大笑いしながら、汗にまみれた部活のユニフォームを着てる姿。
自称彼のファンクラブだという女の子を、照れながら後ろに乗せて、
長い足で自転車を漕いで去っていく姿。
駅のホームで本を読みながら、電車を待つ姿。

あたしはいつも遠くから、
彼をずっと切なく見守っていた。

怒涛のように次から次へと襲ってきた、
7年の思い出の光景を振り切ると、
皮肉に小さく笑って、あたしはまた歩き出した。

どっちにしろ、これは全て、
あたしの中のあたしだけの一方通行の思い出。
自分勝手な思い出だ。
彼の中には、断片も残っていないかもしれない、
勝手な思い出。

あたしは、顔を上げる。

待ち合わせの場所はもうすぐ。

中学校の校門前。
メールアドレスは知らないから、
卒業名簿を見て、手紙を出した。

「お話があります。明日の午後4時半に中学校の校門の前で待って

います」

それだけを記した手紙。

あまりにオーソドックスで、平凡で、
古臭くて、他の誰にも話せるような事じゃないけど、
でも、これが私を変えてくれる。
あたしは、そう信じている。

例え、彼がここに現れなくても。
そんなことだって、シュミレーション済みなんだ。

全てが、想定内。
あたしは何にも驚かないし、
何にもうろたえないし、
決して、彼に希望を抱きはしない。
少女漫画の中の恋愛に、
無邪気に自分を重ねる年齢は、もうとっくに過ぎている。

中学校の校門の前に着く。
春休みの中学校、生徒の姿はない。
まだ肌寒い冬寄りの春の夕風が、あたしの長い髪を吹き乱す。
あたしは校門の冷たい黒の鉄に寄りかかると、
その瞬間を待った。

あたしが変われる瞬間。
あたしが情けないあたしを、脱ぎ捨てられる瞬間。

黒と眩しいオレンジのモノクロの町の風景に、
遠くから、長い足で自転車を漕いでくるシルエットを見つける。
あたしはドキリとして、そのシルエットを見つめた。

彼だ。

すらりと高い背。確か１８３センチだって聞いた事がある。
中学と高校で生徒会長だった。そして、バスケ部のキャプテン。
女の子がいつも回りにいて、

美術部で漫研にも足を突っ込んでいた、オタク系のあたしには、
本当に遠い存在だった。

来てくれたの？
信じられない。どうしよう。

近づいてくるその自転車のシルエットに、
あたしは怯えさえ覚えた。

来てくれないと想定していた事の方が、
来てくれると想定しているよりも、割合が多かったし。

落ち着け、あたし。
プランＢだ。

まるで、死刑台に登る囚人のような心境で、
彼があたしの待つ、中学校の校門までやって来るのを見ている。

もっときちんとメイクしてくれば良かった。
美容室にでも行って、髪をきちんとすれば良かった。
想定外の中の想定内の枠は、とても狭い。

ああ、夕日が眩しい。

あたしは沈む太陽に目を焼いて、
どうにか彼を見ないですむようにならないだろうかと、
無駄なあがきをしていた。

「手紙、受け取ったよ」

中学校の校門に、たどり着いた彼が言う。
長い足を自転車から下ろしている。
オレンジ色を背中に背負いながら。

「はい」
あたしは頷いた。

もうあとは、自動操縦モードだ。
きっと気を失っても言えるだろうというくらい、
色んなシュミレーションをした。
あたしの想定内を信じろ。

「あたしの事、知ってますか？」

目を伏せて続ける。知らないと言われたら、
笑顔で「ファン」でしたと言う。
そして「これからも応援してます」と言って逃げる。
プランB。

「知ってるって、俺ら同級生じゃん」
彼は笑った。
見上げると、もうそれはそれは。
私が7年間憧れてきた笑顔が、すぐ前にあるわけで。

どっひゃー、となる。
私の事を知っていたの？
冴えない同級生でも、覚えてくれていたの？

「じゃなくて、あの。私が言いたいのは」
プランCだ。ファンだったはもう通用しない。
ならば！特攻隊だ！そして、潔く散る。

「・・・ずっと、あなたが好きでした」
あたしは覚悟を決めて、
言葉を口から押し出した。

さあ、どうなる。
あたしは顔を伏せて、目をぎゅっとつぶる。

想定内だと、
「ごめんね、付き合ってる人がいるから」
「悪いけど、君はタイプじゃないし」

どっちにしろ、似たような言葉を言われたら、
にっこり笑って、
「ただ、伝えたかっただけだから」と、
かっこよく去るんだ。
せめて、彼の記憶の中に少しでも残れるように。

あー、あんな風に夕焼けの中、
同級生に告白された事があったと、
この先の１０年後にでも、
彼が思い出してくれることがあるように。

「知ってたよ？」

彼が面白そうに、あたしの顔を覗いて言う。
「は？」
あたしは顔をあげて、彼を見上げた。
「だって」
彼は面白そうな表情を変えずに、あたしを見ている。

だって、分りやすかったってか？
あたしの7年の片思い。
そんなに一人で、あたしは騒いでたんだろうか？

この7年を思い返すと確かに、
友達は、あたしをいつも応援してくれていたし、
バレンタインにも、その他大勢に混じって、
彼にチョコを上げたりしていたのは、事実だ。

じゃあ、柱の陰からそっと覗いて、
彼の姿を見ていたのは、彼には見えていたんだろうか。
美術部のコンテストの出展作品、
こっそり彼をモデルにして描いた絵が、
優秀賞を取ってしまったのが、彼の目に触れたんだろうか。

思い当たる自分のずうずうしさに、
あたしは改めて、自分にがっかりしていた。

こんなずうずうしい片思いが、

報われるなんて1パーセントも無い。
伝えて終わりにするなんて思うことすら、
ずうずうしい。
だって、もう彼は知ってるじゃないか。

「ごめんなさい」
あたしは力なくうなだれた。

この時点で、後に残るあたしの想定内は、
もう分かりきっている。

さよなら。

言葉に出そうと努力したけれど、
声の力が足りなくて、彼には聞こえないだろう。
でも、それでもいいやと、あたしは彼の前から歩き出した。

「待てよ」

ふと、彼があたしの腕を掴む。
あたしは驚いて彼を振り向いた。

「それで？」
彼が唇の端に笑みを浮かべて、あたしに聞く。
「それで？」
あたしは、力なく彼の言葉を繰り返した。
「君は、この後どうしたいの？」
彼は言った。

この後。

想定外だ。

あたしのあらゆるシュミレーションを繰り返した想定内には、
その後なんて一個も無い。

彼は笑みを浮かべたまま、あたしの腕を放さない。

「あの」

あたしは彼に向き直ると、小さく言った。
ずっとずっと7年、夢に思っていた言葉。
あたしのその言葉を聞くと、
信じられないことに、彼はもっともっと笑顔になった。

「了解。俺もずっと、そう言いたかったんだ」
彼は愉快そうに言って、あたしの腕を放さずに、
もう片方の手をあたしの肩に置いた。

夕日が眩しい。
でも、きっと今日のこの思い出は、
私だけの中ではなく、彼の中にも残るんだろう。

それこそ、想定外だ。

あたしは隣に並んで楽しそうに、明日のデートの計画を話す彼を、
不思議そうに見た。

「迷っていたんだ。だって、本当に俺のこと好きかどうか、
ずっと分からなかったから。
だって君、俺が見るとぷいと顔をそむけるし、
近寄れば逃げるし」
彼が苦笑いをして言う。
「だから、君から手紙を貰って、すぐには信じられなかったよ」

ああ、そうなんだ。
あたしは彼を見て思う。

彼にとって、あたしの告白は想定外だったのか。
でも結局は、自分が思う「想定内」なんて、
ほんのたかが知れているものなのかもしれない。

想定外があるから、人生は面白いのか。
というよりも人生なんて、
本当は想定外だらけで出来ているのかもしれない。

あたしと彼のこの後は、
一体何が待っているんだろう。

でも、隣で微笑む彼がいる限り、
恐れずに歩んでやろうと、その時あたしは思ったんだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8135r/

想定外の告白の行方

2011年4月4日21時33分発行